

- A Piaget, J. が、8・9歳と云っているものが、ここでは、4・5歳でできるという一応のみとおし
 できた。
- Q' ここで長さをとりあげたのは何故か。
- A 量を扱う中で、長さというものを連続量の最初
 のものであると考えたからである。
- Q' 長さの他の属性からの抽出をしなかったのは
 何故か。実験材料が平面なのは何故か。
- A 基本的な方法をまず身につけて、その中で簡単
 なものからさせていけば、その後は複雑なもの
 でも可能になると考えたからである。
- Q' 系列化より端そろえが可能な者の割合が低い
 のは何故か。
- A 系列化ができて、端がそろえられない者がい
 る。絶対量を抽出する中で、1 端から端まで見
 る行為の形成、2 端をそろえて行くこと、をし
 ていかなければならない。この二つの問題をから
 ませて端そろえを問題にした。
- 275 順応水準理論に関する研究—発達心理学への適
 用—(北海道教育大学 木村士郎)
- A 刺激の付与と手順を具体的に説明してほしい。
- Q 被験者に標準と系列刺激を与えて比較して、重
 ければで2回、軽ければ1回カネをたたいて実
 験者に知らせる。
- A 言葉でもよいのではないか。
- Q カネと言葉ではちがいがなかった……
- 276 要求水準に関する考察—幼児の要求水準行動
 —(筑紫女学園短期大学 柴島和子)
- Q task の一つは色の違いがあるものだが、この差
 は問題にならないか。
- A これは、Sears, P.S. と同様のものであるが、
 Sears がどのような理由でこのtask を選んだの
 か、文献からは不明である。本実験では、他にも
 う一つのtask があり、これには色の差はないが、
 いずれのtask によっても、同様な発達の様相が見
 られたので、ここでは、色が大きな影響を与えた

- とは思われない。しかし、この点については、今
 後検討したい。
- 277 誘発反応に関する発達的研究(1)(広島修道大
 学 柿木昇治 その他)
- Q 特に内向・外向の差がC, Dに出てきたのは何
 故か。
- A 最初は特殊系、あとのC, Dは非特殊系によるか
 らだと思われる。
- Q しかしそのような分け方は一般的か。
- A 要するに相対的に言えるにすぎない……特殊
 系・非特殊系について論議がAとQの間におこな
 われたが、結局Aは動物実験などによらないとわ
 からないと答えた。
- 278 誘発反応に関する発達的研究(2)(広島大学
 宮崎正明 その他)
- 年齢による amplitude の変化の意味について質問
 がおこなわれ、また、年齢×性格の実験計画につい
 ても質問がおこなわれた。Qは、こまかな点につい
 てはなお追求していきたいと答えた。A'(柿木)は、幼児
 がCとDで amplitude が大なのは、arousal または
 excitability が大であるからかもしれないと回答し
 た。
- 279 誘発反応に関する発達的研究(3)(広島大学
 森 敏昭 その他)
- Q 物理的刺激の次元が、倍増変化しているが、子
 どもには驚くほど大きい変化となっているのでは
 ないか。
- A 物理的尺度と心理的尺度の対応は仲々むずかし
 い事柄である。
- A'(柿木) 心理的变化の指標(子供の驚くこと)は、
 心博のをとってみればわかるかもしれない。
- 以上、277~279 の発表について、心博と脳波の変動の
 性質およびそれらの間の関係について討議がおこな
 われた。また、内向外向の尺度の性質についても、277 で
 使用した Eysenck の尺度と Jung の尺度を同一視で
 きないことについて意見が出された。

発 達 (280~288)

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 座長 宮 本 昇・山 根 薫 | —職業の諸特性の認知— |
| 280 職業的行動の発達的研究(1) | 職業研究所 ○松 本 純 平 |
| —生活環境と職業認知についての予備的検討— | ” 渡 辺 三枝子 |
| 職業研究所 ○道 脇 正 夫 | 282 職業的行動の発達的研究(3) |
| ” 山 下 恒 男 | —職業概念の形成— |
| 281 職業的行動の発達的研究(2) | 職業研究所 ○山 下 恒 男 |

- 道 脇 正 夫
283 高校生の職業レディネスに関する研究(Ⅲ)
普通高校生徒と農業高校生との比較
職業研究所 ○渡 辺 三枝子
松 本 純 平
284 青年の意識態度に関する研究(第1報)
中高校生の生きがいについて
科学警察研究所 小宮山 要
285 青年の意識と行動
一農村青年の実態調査的研究—
福島女子短期大学 渡 辺 俊 彦
286 女子学生の意識
高崎経済大学 宮 本 昇
287 非行少年の性的発達
立正女子大学 山 根 薫
288 現代青年の余暇生活の研究(その1)
山梨大学 山 田 良 一

I 全体的特徴

この部会での発表は、9件であったが、280から282までは同一テーマについての分割発表(280の発表者は欠席のため、山下がかわって発表した)であったので、実際は、7件であった。しかし、284以降は、すべて、青年の生活意識に関する研究であったから、283を境界として、テーマは、職業心理と青年心理の2領域に大別されよう。各人の発表要旨は、次のようであった。

道脇らの研究は、生活環境が職業認知に及ぼす影響を解明するために、地域差を考慮しながら、小学校2年と5年を対象に、アンケート調査を行ない、子供達の志向する職業名が具体的なものがかなり多いこと、虚像的なものと現実的なものが混在していることなどが特徴的で、結果は、学年差よりも性差において顕著であったと報告した。

松本らは、個別的職業の諸特性の認知の発達を解明するために、同じく小学校2年と5年を対象に、21の職業名を掲げて10項目で、これらを調査し、情緒的・直観的に判断できる職業に対しては、それが男性的か女性的かということと回答傾向が大きく影響されたが、現実的・客観的な知識を根拠として、はじめて、より確かな判断が可能となる職業名においては、知識や経験に大きく依存すると報告した。

山下らは、職業概念の形成過程を解明するために、2年と5年を対象に、3つの事象を呈示し、そのうち、最も近似しているものどうしを線で結合させ、さらに、

その理由を記述させる設問5つによって調査したところ、関係づけの基準が、形式→相互交渉→場面→行為の現象面→行為の社会的機能という段階で移行するようだと報告した。

渡辺らの発表は、昨年に継続して、職業レディネスに関する研究であったが、今回は、普通高校生と農業高校生を比較して解明をすすめたところ、普通高校生は、専門的知識や技術を要求する職業に対して、興味や自信度が、はるかに高いが、これを達成欲求によって説明できず、達成欲求は、志向職業群自体と関係あるようだと報告した。

小宮山は、現代の青年の生きがい構造を解明するために、生活感情、時間的展望、生活の満足度、価値態度、生活欲求、余暇活動、その他の7領域を設定し、生きがい体験と強い関連性を示す要因の解明を試み、その結果を克明に報告した。

渡辺は、農村青年の生活実態を調査し、彼らの社会的・心理的構造を明らかにしようとして、人口の推移状況、経営耕地の面積、分配所得の伸び率、上級学校進学率、社会教育への参加状況、生活時間、出稼ぎ状況、生活満足度につき、これらの結果を詳細に報告した。

宮本は、女子学生の生活意識構造を解明するために、一対比較法により生活価値観を、SD法で学問・結婚・レジャーに対するイメージを分析し、価値観においては、愛情や健康に高いウェイトを示し、金銭や他人の評判に対しては低く評価していること、3つのイメージについては、因子分析の結果、それぞれに対して第4因子まで見出したことを配布資料にもとづいて報告した。

山根は、近年増大しつつある青少年の非行に着目し、彼らの性的発達の段階の解明こそ、指導の有力な手がかりとなるものと考え、質問紙法により、これを調査した結果、非行青少年の性的発達は、一般高校生よりも早熟であり、性的倫理観においてもやや劣っていると報告した。

山田は、余暇生活が、他の生活局面に比較して、社会的拘束性が弱く、それだけに、主体的行動が表出されやすいことに注目して、大学生の余暇生活の具体的な態様を分析した結果、各種の生活問題に関しての感情において、青年期的特質と現代青年共通の特質が併存し、それらが、相互に機能的連関をもって構造化されていること、余暇生活の形態において、日常生活型が圧倒的に多いこと、余暇生活の感情の分析において、満足群が不満足群よりも、ポジティブであることなどを見出したと報告した。

II 討論の内容

道脇らの研究に対し、山根は「生活環境として農山村などは意味があるが、その他の地域はあまり意味をもたないのではないか。むしろ、家庭の職業が重要である」と質した。これに対し「今後、家庭や学校に、研究の対象をひろげていく」と答えた。

松本らの研究に対して小宮山は「2年と5年との差をどのように解釈するか」と質問したのに対し「質問項目のなかには、就業者比率はなどから客観的に測定できるものもある。これにより発達成熟をとらえることも可能と考える」と答えた。

山下らの研究に対し、山根は「職業概念の形成に、小学生と大学生の間に差はなかったのか」と質問したが、これに対して「予想したほどには差がなかった」と答えた。

渡辺らの研究について、山根は「職業レディネスの概念をどのように規定したか」と質したのに対し、渡辺は「態度的側面と能力的側面とを考え、今回は態度的側面の一部の研究を発表した」と答えた。

小宮山の研究について、大山(京都市児童院)は「生きがいをどのように定義するか」と質したのに対し、「生活感情から生きがい構造を調べていきたい」と答えた。また、山根が「総理府の意識調査に対する意見はどうか」と質したのに対し、「サンプリングの精度は

極めて高いが、単純集計に終わっている。もう一步、心理的側面にふみこみ、教育的に利用価値の高いものであって欲しい」と述べた。

山根の研究について、松本は「実態調査に対する教育的配慮とは何か」と質したのに対し「実態調査が、測定目的を超えて被験者に影響を与えるかもしれないが、より広い視野に立って理解がされねばならないという意味だ」と答えた。

宮本の研究について、古沢(梅光女学院大)は「質問紙法の調査結果は、往々にしてホンネが表明されずタテマエがでると思うが…」と質したのに対し、「その点を苦慮して、特にSD法の形容詞対を吟味した」と答えた。その後、山田・小宮山・山根から、それぞれ質問紙法の限界を克服する手法について、意見が陳べられた。

山田の研究について、中島(愛知県勤労会館)は「勤労青年の余暇活動の研究もするのか」と質した。これに対し「生活心理学的な立場に立って、大学生や勤労青年の生活構造を分析し、その差異を明らかにしていくつもりだ」と答えた。また、山根は「余暇について調査する場合、余暇という概念の規定が難しいのではないか」と質したが、「彼らの余暇に対する意識と、われわれが概念的に規定した余暇という言葉の間には、たしかに相当なズレがあるようだ」と答えた。

人 格 (301~309)

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 座長 村 山 登・岩 脇 三 良 | 306 大学生の精神衛生 |
| 301 定時制(夜間)高校退学者の性格の因子分析的研究 | —健康調査結果の高得点者群と低得点者群の比較— |
| 岡山大学 ○木 下 富 夫 | |
| 〃 三 宅 守 一 | 広島大学 ○藤 士 圭 三 |
| 302 身体像に関する研究(Ⅲ) | 〃 小 林 利 宣 |
| —服飾と適応について— | 〃 上 地 安 昭 |
| 福岡教育大学 ○鶴 光 代 | 307 高齢者の精神生活構造について |
| 〃 秋 山 俊 夫 | —その1 他者との関わり合いの中で捉えられた自己像について— |
| 303 身体像による人格の研究 | 東京大学 牟 田 隆 郎 |
| 北海道教育大学 ○村 山 登 | 308 現代青年の活動意欲の構造(その1) |
| 〃 福 島 正 治 | 東北大学 ○寺 田 晃 |
| 304 中学生のBody Image | 〃 宮 川 知 彰 |
| 香蘭女子短期大学 田 中 康 世 | 〃 塚 野 州 一 |
| 305 学校不安 | 宮城教育大学 佐 藤 克 夫 |
| 中京大学 ○岩 脇 三 良 | 309 現代青年の活動意欲の構造(その2) |
| 山梨大学 奥 野 茂 夫 | |